

旺文社文庫

に ん じ ん

ルナール 著
辻 昶 訳



「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人間となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版物としての使命感にたつて、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をわづらひ、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いさゝかも知識人たらしとする者が、生涯の教養の基盤となり、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多量に刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しめ、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

旺文社社長

赤尾好夫

埼玉県立熊谷図書館蔵
45.7.24 受入
編輯顧問 大村 毅
(五十音順) 塩田良平 中野健蔵 森戸辰男

旺文社文庫

に ん じ ん

160 円



昭和41年7月1日	初版発行
昭和45年6月10日	重版発行
訳 者	辻 昶
発 行 者	鳥 居 正 博
印 刷 所	株式会社 文 弘 社

発 行 所

株式会社 旺 文 社

162 東京都新宿区横寺町

電話 東京 (03) 267-1111 (代)

0197/620-20/0724

503098

© 辻 昶 1966

(許可なしに転載、複製することを禁じます)

落丁・乱丁・不良本はお取り替えます
書店または本社に直接お申し出ください

(中村印刷・清水印刷・穴口製本)

旺文社文庫

に ん じ ん

ルナール著
辻 昶訳

旺文社

ファンテックとバイイに⁽¹⁾

(1) ファンテックはルナールの長男の、バイイは長女の愛称。

目 次

めんどり	犬	いやな夢	きたない話で恐縮ですが	うさぎ	つるはし	猟銃	もぐら	うまごやし	コップ	パンの中身	らっぱ
しゃこ			尿瓶								

三 五 四 四 六 三 三 六 三 五 七 三 〇 七

髪 かみ の束 たば	五
水 みづ 浴 よく	六
オノリーヌ	六
鍋 なべ	七
言 い わなかつたこと	七
アガト	七
予定表	八
めくら	八
元日	九
休暇 きゅうか の際 さい の行き帰り	九
ペン軸 ペンじく	九
赤いほったた	一〇
しらみ	一七
ブルートゥスのように	二三
にんじんからルビック氏への手紙より	二六
付ルビック氏からにんじんへの返事	二六
小屋	二六

ねこ	一三九
羊	一四四
名つけ親	一四九
泉	一五三
ブラム	一五七
マチルド	一六〇
金庫	一六五
おたまじゃくし	一七〇
どんでん返し	一七四
狩り	一七七
はえ	一八一
最初のやましぎ	一八四
つり針	一八七
銀貨	一九三
自分の考え	二〇一
葉っぱの嵐	二〇六
反抗	二一〇

締めくくり
にんじんのアルバム

解説

人と文学

作品解説

作品鑑賞

『にんじん』の悲劇

代表作品解題

参考文献

年譜

あとがき

辻つじ
和と

おほほまひでこ
大浜英子

挿絵
F・ヴァロトン

二五
二三

二七

二七

二四

二四

二五

二六

二六

二五

二七〇



めんどり

「きっとそうよ」と、ルビック夫人。「またオノリースが、とり小屋の戸を閉めるのを忘れたんだわ」

なるほど、窓ごしに見ると、そのとおり。広い庭のむこうはじには、とり小屋の小さな屋根が見えるが、闇の中に、あけっぱなしになった戸の黒い、四角な影が浮きあがっている。

「フェリックス、おまえ、閉めにいつてくれるかい？」ルビック夫人が、三人の子のうちで一番年上の男の子にきく。

「とりの世話なんかするために、生きてるんじゃないよ」と、フェリックス。血色が悪くて、ぶしように、臆病な男の子だ。

「じゃあ、おまえは、エルネスチヌ？」

「まあ！ あたしにですって、ママ。こわくってとてもよ！」

兄きのフェリックスも姉のエルネスチーナも、ろくに顔をあげずに返事をする。ふたりはテーブルの上にひじをつき、額がふれあわんばかりのかっこうで、本に読みふけっている。

「まあ、あたし、なんてばかだったんだろう！」と、ルビック夫人。「忘れてたわ。にんじん、おまえ、とり小屋を閉めにいっておいで！」

夫人は、末っ子にこういうあだ名をつけていた。この子が赤毛で、顔がそばかすだらけだったから。テーブルの下で、遊ぶともなく遊んでいたにんじんは、立ちあがって、おどおど答える。

「でも、ママ・ほくだってこわいよ」

「なんだって？」と、ルビック夫人。「大きなりをした男の子がねえ！ 冗談じゃないよ。さ

あ、さあ、早く行っておいで！」

「知ってるわよ。この子は、おすの山羊みたいに気が強いのだよ」と、姉のエルネスチーナ。

「世の中にこわいものなしってやつさ」と、兄きのフェリックス。

こうおだてられて、にんじんは得意になり、このおせじを無にしては恥ずかしいとばかり、もう、ひるむ心とたたかっている。勇気をつけようと、とどめの一撃、行かなきゃ、ごほうびにほったをびしゃりだよ、と、母親が言う。

「道だけは照らしてくれなきゃ」と、にんじん。

ルビック夫人は、知らないよというように肩をすぼめ、フェリックスは、こばかにしたようにうす笑いしている。おもいやりのあるのはエルネスチーナばかり、ろうそくを持って、廊下のはじま

で弟についていく。

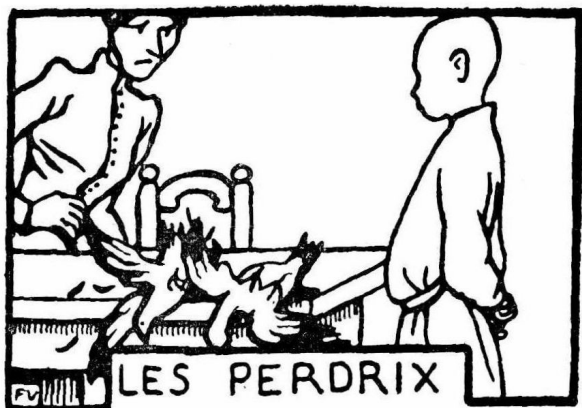
「ここで待ってるわ」と、エルネスチーナ。こう言ったくせに、すぐ逃げこんでしまう。さっと吹きつけた一陣の風に、ろうそくの炎がゆらゆらして消えたので、こわくなってしまったのだ。

へっぴり腰で、足は釘づけ、にんじんは暗闇の中でがたがたふるえだす。一寸先も見えないので、めくらになったのかと思う。ときどき風がさっと吹きつけてきて、冷えきったシーツみたいにからだをつつんで、にんじんをさらってゆく。きつねや、いや、おおかみまでもが、指やほった息を吹きかけてきたのではないだろうか？　こうなったらもう、暗闇に穴でもあけるような意気こみで、頭を前につき出し、あてずっぽうに、とり小屋の方につき進むほかに道がない。手さぐりで戸の鍵をつかむ。にんじんの足音をきいためんどりたちが、とまり木の上でびっくりして、こっつ、こっつと鳴きながら騒ぐ。にんじんはこうとなる。

「静かにしろよ。ほくだせ！」

戸を閉めて、脚や腕に羽でもはえたように、一目散に逃げだす。はあはあいいながら、得意になって、あたたかく、明るい家の中にもどってくると、泥と雨水とで重くなったぼろ服を脱いで、新調のかるいやつに着がえたような気持ちになる。にっこり笑いながら、得意満面でつつ立ったまま、みんなにはめられるのを待っている。もう、安全だ。さぞ両親は心配しただろうと思って、ふたりの顔にそのなごりを見つけようとする。ところが、兄きのフェリックスも姉のエルネスチーナも、知らん顔で本を読みつつづけている。ルビック夫人は、いつもの調子でにんじんに言う。

「にんじんや、これから毎晩閉めにいくんだよ」



しゃこ

いつものように、ルビック氏はテーブルの上に、獲物袋えものぶくろの中味をあけている。しゃこが二羽にわに、兄あにきのフェリックスが、壁かべにさがっている石盤いしばんにそれを書きとめている。この子のお役目だ。子どもたちには、めいめいお役目がある。姉のエルネスチーヌは獲物の皮をむいたり、羽はねをむいたりする。にんじんはといえば、傷きずついた獲物の息の根をとめるのが専門だ。血も涙もない無情な子どもだというもっぱらの評判ひょうばんだったので、こういう特権をさずけられたのである。

二羽のしゃこはばたばたして、首を動かす。

ルビック夫人——どうして、早く締めてしまわないんだい？

にんじん——ママ、今度は石盤せきばんに書くほうにまわしてよ。

ルビック夫人——おまえの背せじゃ、石盤にとどかないよ。

にんじん——それじゃあ、羽をむしる方がいいな。

ルビック夫人——あれは、男の子のすることじゃないよ。

にんじんは二羽のしゃこをつかむ。ルビック夫人は親切顔でやりかたを教える。

「それ、そこんところ、首のところを締しめるんだよ、羽を逆さかにしごいてさ」

にんじんは片手に一羽ずつつかみ、手を背中せなかのうしろにまわして、やりはじめる。

ルビック氏——二羽一どきにか。こいつは驚いた！

にんじん——その方が早いからさ。

ルビック夫人——神経質しんけいしつぶるんじゃないよ。心ん中じゃ、ゆっくり楽しんでるくせに。

二羽のしゃこはからだをひきつらせて抵抗ていこうする。翼つばさをばたばたさせて、羽をあたり一面にとび散らす。死んでやるものか、と思っっているのだ。友だちひとりなら、それこそ、片手でもっと造作ぞうさなく締め殺せるだろう。両ひざにしゃこをはさんでおさえつけ、赤くなったり青くなったり、汗びっしょりになったり、なんにも見まいと上の方を向きながら、いっそう強く締めつける。

しゃこも執念しゅうねんぶかくがんばる。

かたづけたいとかんかんになって、今度はしゃこたちの両脚をつかみ、鳥の頭を靴のさきへたたきつける。

「わあ！ 人でなし！ 人でなし！」と、兄きのフェリックスと姉のエルネスチーナが叫ぶ。

「とてもみごとなやりかたじゃないか」と、ルビック夫人。「ほんとに鳥たちかわいそうだよ！ あの子の手にかかって、あんなふうに死ぬのはまっぴらごめんだね」

年季のはいった狩獵家のルビック氏も、さすがに胸が悪くなって、部屋から出ていく。

「できたよ！」にんじんはこう言って、死んだしゃこをテーブルの上に投げる。

ルビック夫人は、そのしゃこを何度も念入りにひっくり返してみる。

砕けた小さな頭蓋骨から血が流れ出している。脳みそもちよっとばかり。

「早くとりあげちまえばよかったんだよ」と、ルビック夫人。「なんて、きたない殺しかただろう」兄きのフェリックスが言う。

「たしかにねえ、きょうは、いつもみたいにはうまくいかなかったな」



犬

ルビック氏と姉のエルネスチーナは、ランプの下で、テーブルにひじをついて、読んでいる。ルビック氏は新聞、姉は賞品にとった本。ルビック夫人は編物をし、兄きのフェリックスは両脚をストープであぶっている。にんじんは床にちょこんとすわって、あれこれ思い出にふけている。

と、突然、戸口のくつぬぐいをかぶって眠っていた犬のピラムが、ううと、うなり声をあげる。

「しいっ!」と、ルビック氏。

ピラムはもっとひどいなり声をあげる。

「ばか!」と、ルビック夫人。

それでも、ピラムが猛烈なほえかたをしたので、みんなはびくつとする。ルビック夫人は心臓へ手をあてる。ルビック氏は歯をくいしばって、

犬を横目でにらむ。兄きのフェリックスはがなりたて、まもなく、おたがいの言葉が聞こえないほどのさわぎになる。

「だまらないか、いやな犬だなあ！　だまれば、畜生！」

ピラムのうなり声はひどくなる。ルビック夫人は、何度もびしやりとくわせる。ルビック氏は新聞でたき、それから足でける。たたかれるのがこわさに、ピラムは腹ばいになり、鼻を床にすりつけてほえる。くつぬぐいのマットに口をぶつけて、たけり狂っているのを見ると、自分の声をこなごなにたたきつぶしている、といったふうにしかなえない。

ルビック一家は怒りで息がつまりそうだ。みんなは総立ちになって、犬をやっつけるが、犬は腹ばいになったまま、がんとしていることをきかない。

ガラス窓がきいきい鳴り、ストーブの煙突がふるえ声をあげ、姉のエルネスチーナまでがわめきたてる。

だが、にんじんは、いいつけられもしないのに、偵察に出かけた。たぶん、帰りの遅くなった渡り職人が通りをとって、ゆうゆうと家へ帰ってゆくところなのだろう。ひょっとすると、盗み心を起こして、庭のへいでも乗りこえているのかもしれない。

にんじんは真暗な長い廊下を進んでいく、両腕を戸口に向かってさしのばして。かんぬきを見つけど、すさまじい音をたててひっばる。だが、戸をあけようとはしない。

昔だったら、危険を覚悟で外にのり出し、口笛を吹いたり、歌をうたったり、足を踏み鳴らしたりして、一生けんめいに、敵の肝をつぶそうとしたものだ。

が、このごろはずるくなっている。

にんじんのやつは、大胆不敵だたんふてきにも、外をすみずみまで調べて、忠実な番人よろしく、家のまわりを見まわっているのだらう、こう、両親は思いこんでいる。だが、にんじんはいんちきをして、戸のうしろに、びったりとへばりついているのだ。

そのうち、いつかは、しっぱをおさえられるだらう。でも、もう長いこと、この策略さくくりやくはうまくいっているのだ。

くしゃみをするのと、せきをするのと、これだけが心配だ。息をじっとこらしているが、目をあげると、戸の上の小さな窓ごしに星が三つ四つ見え、きらきら光る清らかな光に、冷えあがるような気がする。

だが、もう、そろそろ帰る時間だ。芝居しばいが長びきすぎるのは禁物きんもつだ。くさいぞ、と思わせることになる。

もう一度、かほそい手で、重いかんぬきをゆすぶってみる。かんぬきはさびついたかすがい、のちでいきい言う。がたがたいわせながら、かんぬきをみぞの奥まで押しこむ。このそうぞうしい音を聞いて、ぼくが遠くから帰ってきたのだ、義務を果たしてきたのだと、みんなが思ってくれますように！ 背骨をくすぐられてでもいるようなほっとした気持ちで、みんなを安心させに、一目散にかけていく。

ところが、どうだろう。このまえのときとおなじで、にんじんのいないまにピラムが黙ってしまったので、安心したルビック一家は、めいめい、おきまりの場所にもどっていた。だれからたず